

平成24年度 郷土館移動展 標本に隠されたひみつ



郷土館には、タンチョウやシマフクロウのはく製、エゾカオジロトンボの乾燥標本など、さまざまな「標本」が展示されています。こういった標本は展示することで、皆さんにどんな生き物なのかを知ってもらうことができますが、実は標本が

できることはそれだけではないのです。

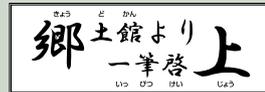
今回は郷土館が保存する標本を展示し、そこから分かる情報を読み解いて、標本に秘められた役割や標本を集めて保存する郷土館の役割を紹介します。

日 程	会 場
9月21日(金)～27日(木)	阿歴内公民館
9月28日(金)～10月4日(木)	茶安別農村環境改善センター
10月5日(金)～12日(金)	開発センター
10月13日(土)～19日(金)	町立図書館
10月22日(月)～26日(金)	中御卒別小学校
10月29日(月)～11月2日(金)	沼幌小学校

以降の日程については、随時広報しべちゃでお知らせします。

大川のほとり

—郷土館だより(第55号)—
☎487-2332
開館時間
午前9時30分～午後4時30分



人物伝で紹介した明治の農事暦を見ると現在とほぼ同じ気候であった事が分かります。1月に最も快晴が多いというのは、標茶らしいと感じました。(坪)



釧路集治監人物伝 14

釧路集治監第五代典獄 千石 徹 (後編)

明治28年(1895年)4月6日に、釧路分監の分監長へと就任した徹。当時の釧路分監(※1)では、囚人を使った過酷な道路開削や多くの犠牲を出した川湯跡佐登硫黄山の採掘作業などが世論の反発を生み、危険な外役を行わない方針に切り替わっていました。その代わり、敷地内にて囚人たちを使い、農業を積極的に実施しました。集治監で行う農業は、もとも囚人たちの食べ物を作る事を目的としていましたが、今後発展するであろう道東への入植事業を見据え、どのような作物が気候風土に合うのか調べる事も求められました。

釧路分監では広大な農地を持つていたため、農業の専門家を雇い、西洋式の農業が行われました。また、当時標茶市街にあった釧路二等測候所の協力も得て、作物の種子は札幌農学校(※2)に依託し適種を探しました。そして道東で作付けできそうな作物は全て作付け、どの作物をいつ頃作付けすれば、より良い収穫が得られるのか調べました。また、この時期磯分内へ入植した宇佐美文三郎に、作物の種子を貸し与えた文書が、郷土館に残されています。これは、この地へ入植した人々に対し、集治監が支援を行っていた事を示しています。徹が勤務していた頃の集治監は、農業試験場のような役割を担っていたとも言えるでしょう。特に徹が着任した明治28年からは、農耕に従事する囚人を増加し、1日平均250人の囚人(※3)が農耕作業を行いました。そして開墾地を作るために集治監用地内の森林を伐採し、薪集めと炭焼きも行いました。記録では炭窯が12カ所作られ、これらの作業に一日平均160人ほどの囚人が作業に携わりました。集治監で行われた農事成果は、釧路二等測候所により「北海道集治監釧路分監に於ける多年の実験に二三農家の経験を加へたる」農事暦となりました。農事暦とは、入植農家の一年間の日程として示したものです。この暦によれば、大まかには5月に種をまき、夏場に除草や間引きを行い、9月に収穫する。そして冬場は道具の手入れと炭焼きを行う事が示されています。

徹の前半生は幕末の動乱の中、公卿澤柳の元で刀を振るい、危険と隣り合わせの日々を送ってきました。しかし、集治監勤務時代は農業を主体とした労役が主であったことから、一転して管理業務と事務作業が多かったと思われれます。徹が分監長として勤務した明治28～31年の脱獄者数や拒捕斬殺、その他の件数(※4)はなく、安定した治安を保っていました。

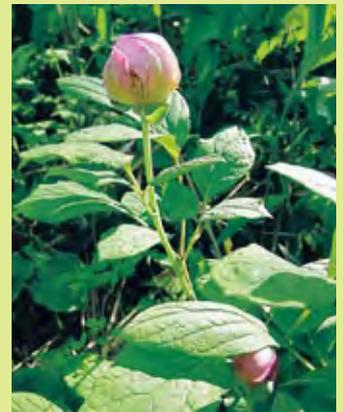
これ、な〜んだ?

その4



9月の山で見つけました。赤と黒のタネがたくさんついた、ちょっと不気味な植物。これはなんでしょう……?

実はこれ、ペニバナヤマシヤクヤクのタネ。黒いタネが本物のタネで、赤いタネは飾りです。鳥にタネを食べてもらい、ふんにまぎれて遠くに運んでもらうために、このような飾りを付けて目立たせているといわれています。この花は町指定の天然記念物ですので、タネを見つけても、持っていかないでくださいね。



郷土館
お宝発見!

郷土館に眠る数々の逸品。今回は「30年式銃剣」を紹介し

ます。これは明治30年から太平洋戦争まで使われた、日本の代表的な銃剣（歩兵銃などの先に取り付ける剣）です。上の銃剣は、刃が付いており現在でも刃物として使えます。一方、下の銃剣は町内の学校などで戦時中の訓練用に使われたもので、刃はついておりません。終戦後こうした戦争の道具は、アメリカの進駐軍などによって多くが処理されたため、本来は残っていないはずの道具ですが、さまざまな経緯を経て残され、郷土館に寄贈されました。

ちなみに現在販売されているものは銃刀法の問題もあり、ほとんどが複製品です。美術鑑賞用として売られている本物の30年式銃剣は、状態にもよりますが20~30万円程で売買されているようです。

囚人を農業に従事させる考えは、その後、網走監獄へと受け継がれ、「農業監獄」と呼ばれるほど発展を遂げますが、その始まりはこの時期と言えらるでしょう。安定した治安の中、監獄農業を発展させ、釧路地方の農事暦作製に貢献した事は、釧路分監と徹の大きな功績と言えます。徹は明治31年7月29日に非職となりました。53歳でした。

この後の徹については、徹の長男興太郎について記した『千石興太郎』に記載が見られます。徹は長身瘦躯で融通がきかず頑固だったと回想しており、集治監非職後72歳で教士の免状を取り、老いても竹刀を持ったら颯爽たる勇姿だったと書かれています。また息子興太郎には、尊皇心の養成に努め、「男児涙を流すのは一生のうち陛下崩御のときと親の死んだ時だけだ」と教えました。徹は大正9年4月に77歳で亡くなりました。徹は生前、澤卿から送られた「猶興堂」と書かれた書を大切にしており、この書にある興の字を息子に与えています。この書はその後千石家の家宝となったそうです。

なお長男の興太郎は、札幌農学校農学科を卒業後大成し、太平洋戦争直後に成立した東久邇内閣の農商務大臣、農林大臣を務めました。そして生涯を通じて、協同組合運動に関わり大きな業績をあげました。協同組合運動はその後、農業協同組合につながっていききました。現在でも千石家の業績が息づいています。

「北海道集治監釧路分監に於る多年の実験に二三農家の経験を加へたる」農事暦『北海之殖産』九五

十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月
上旬より根雪となる。収穫物の搬出その他、炭焼き等を行う。	上旬には初雪が降る。炭焼きを行う他、必要な小屋などはこの時期に建設する。	本月上旬には、最低気温氷点下になり、濃霧が最も多い時期。豆類の収穫時期である。木灰を包むススキや、小屋用の葺き茅を刈り取る。	各麦類の収穫時期となる。	本月は全年中曇天多く、雨量も最大である。中旬以降は三〇℃以上になる事は無い。ライ麦・裸麦の収穫期	本月中旬より最高気温三〇℃以上になる。作物の収穫の他、牧草も採取の時期である。	この時期初旬より追々苗の間引きや草取りを行う。春時き作物相当の手入れを要する時期である。	この月、中旬には雪が無くなくなる。春時きの作物はこの時期が良い。キウウリやナスもこの時期。	この月南西風最も多く、中旬には雪が解け始める。新墾に着手する他、農事の準備を行う。	この月は南西の風多く、中旬には最も寒い時期が過ぎる。肥料の運搬、厩肥の撒散を行う。	この月は晴天が多いが、暴風も多い。一月と同じ事を行う。	この月は寒冷だが快晴が最も多い。炭焼きや薪伐り、農具修理を行う。

※一部抜粋、読みやすく文体を変えています。

- ※1 釧路集治監は当時、北海道集治監釧路分監と名称が変わっています。
- ※2 現在の北海道大学。
- ※3 この時期の総囚人数の20~30%。
- ※4 脱走した囚人が捕縛時に抵抗するなどした場合、その場で処断しても良いことになっていました。また、この数には、囚人の役務時での事故死者数も含まれています。明治28~31年までは、該当0人でした。